広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

「マス（大衆）」から離れた新しいデザインの姿に焦点

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね途中経過のプロダクトを受けて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。静岡県選出、デザイナーの花澤啓太さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月17日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションする花澤さん

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

自分の思いを形に込め

静岡市の港町、用宗地区に事務所兼家具・雑貨ショップを構えている花澤さん。これまでに生み出した製品がグッドデザイン賞をはじめ数々の賞に輝くなど、全国的にも評価が高いデザイナーだ。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECTには地域の伝統工芸を継承する若手職人が数多く参加する中、デザイナーは数少ない。花澤さんは「製法や素材などを自由に選べる立場を生かし、技術とデザインの融合の可能性を探りたかった」と話す。

港町の一角に構えたオフィス兼ショップ

家具メーカーに勤務し、北海道では2級技能士の資格を取得した花澤さんにとって木材は得意な素材だ。食卓に置いて家族全員が使える木箱のアイデアを携え昨年6月のキックオフ・セッションに臨んだが、「プロダクトを0から考え直したい」と小山氏とサポートメンバーの川又俊明氏との面談でいきなり白紙撤回を宣言した。「自分の小箱は、挑んでいない」という思いからだったという。両氏はそろって花澤さんの申し出を快諾。「デザイナーとしての挑戦を楽しみにしています」と緊張した表情の花澤さんの背中を押した。

モノづくりの現場でコンセプトがクリアになる

川又氏に過去の作品を紹介する花澤さん

10月のエリア・コンサルティングで川又氏に披露した試作品は、首から下げるルーペと細木細工の花台の2点。川又氏は「どちらも完成形を見てみたい。どれを出展するかじっくり悩んでください」とデザイナーの直感に委ねた。

結果的に花澤さんはいつの間にか老眼鏡が欠かせなくなった母親に贈るためのルーペを作ると決断した。「デザイナーは多くの人に受け入れられるために、時に個性をそぎ落とさなければなりません。その副作用で最近、世の中に同様の意匠があふれていると感じていたので『マス』を見ず、自分が一番強く思っていることを形にしようと振り切ってみました」と話す。

首に掛けて贈る行為もデザインの一部だ

プレゼンテーションでは母親の写真も紹介し「このプロダクトはこの人のために考えて生み出した」というメッセージを伝えた。

プレゼンテーション後の花澤さんは「これからのデザイナーには『作家性』が求められることが分かりました。マスを追うのではなく、自分の思いを突き詰めるー。そこから生まれたプロダクトは必ず同じ思いを持つ人たちから共感を得られます。思いを形にできる職人や作家たちをつなげるのが僕の役目だと気が付きました」と語り、新しい自分への第一歩を踏み出した。

戸田さん（右）の技術が花澤さんのコンセプトを形にしてゆく

指物の技、組紐の粋

ルーペの枠とふたは、工房「こぞう匣スタイル」（静岡市）の木工職人、戸田勝久氏の駿河指物の技を採用した。木を曲げたり、丸くくり抜いたりする方法では出せない存在感を求めていたとき、木の棒に角度を付けて寸分たがわず張り合わせて茶筒を作る指物の技法に出合ったからだ。戸田さんは「花澤さんの思いまで読み取って具現化する工程はとても楽しい経験でした。胸を張って全国に発信できるように、と微調整を繰り返しました」と振り返る。

20本の木が組み合わされて作られる20角の円。滑りにくく、手に取った際に角の感触が心地よい仕上がりになった。サクラ、ウォールナット、カシの3種類で製作。「サクラには『これまでありがとう。このルーペで僕の母親から卒業してください』というメッセージも込められています。さらに一つ一つの角が人生の節目にも重なり物語性も加えられました」と語る。

ルーペには首から下げられるようにストラップも付けた。プレゼントするときに感謝を伝えながら、メダルのように母親の首に掛けてあげたいという思いからだ。

はじめは革ひもを付けてみたが贈り物のイメージと合わなかったという。エリア・コンサルティングの際に川又氏に相談したところ三重県代表の匠で、組紐職人の松島康貴さんを紹介された。「連絡を取るとすぐに見本を送ってもらえました。輪になる部分に『つけツボ』という技法を使ってもらい美しく仕上がっています。自分だけでは決して達成できなかったレベルです」と語る。繊細な色合いと、端正な組み目が美しいストラップがルーペを飾ることになった。

「デザイナーは、誰かのひらめきや思いを形にして、マーケットに届ける流れをサポートする職業です。しかし今回は僕が出発点であり、主人公。久しぶりにじっくり自分と向き合いました」と花澤さんはプロダクトの発想から完成までを振り返る。「すでにあるモノ・技術を組み合わせるのではなく、自分の頭の中のアイデアをどうしたら具現化できるのかを探し求めるプロジェクトでした。課題にぶつかるたびに、周りの方々が解決をサポートしてくれたからこそ完成させることができました」と感謝の気持ちを表した。

完成プロダクト　メダルのルーペ「LOOP」lens for Parents

花澤　啓太
静岡／デザイナー

1978年静岡県生まれ。大阪芸術大学卒業後、複数の家具メーカーに勤めた後、2008年プロダクトデザイン事務所「mag design labo.」を設立。「境界」をテーマに色々な活動の中から芸術を模索し、色々な手段の中からデザインを模索している。2011,15,16年グッドデザイン賞受賞。2014年国際交流基金新・現代日本のデザイン100選に選出。

花澤　啓太　静岡／デザイナー

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT